

LET 関西支部通信

62



■ 巻頭言 ■

● 小山 敏子

(関西支部 副支部長 大阪大谷大学)

中国北京から配信される冬季五輪の明るいニュースとは対照的に「右肩上がり」「過去最高」と日々更新される感染者数。終息が見通せないコロナ禍が3年目に入りました。感染された方々の一日も早いご快復をお祈りするとともに、医療や介護、そして保育に関わる方々のご尽力には、ただただ頭がさがる思いです。

先月、日本医師会が「保育士や教員についてもエッセンシャルワーカーとしての位置づけを明確にすること」を国に求めたという報道がありました。通信環境や LMS などが整備された大学などとは異なり、特に、小、中学校の先生方は、感染対策と教育活動の継続の板挟みです。GIGA スクール構想の加速化で、タブレット端末や WiFi 環境などのインフラは整備されたとはいえ、肝心の人手不足が解消しない限り状況は改善しないと危惧しています。

さて、このコロナ禍の2年間、大学の授業では、ZOOM や Teams の利用や Stream、YouTube への動画配信も日常となっています。特に外国語教育のような演習系の科目では、オンライン環境であっても可能な限り対面に近い状況を設定しようと各教員が努力してきました。そうした経験からわたし自身が感じたことは、「対面で場を共有する授業では、学生たちがくれる情報量が圧倒的に多い」ということでした。もちろんオンラインでも Breakout session でグループ討議をしたことを発表してもらったり、コメントなどは Chat に書いてもらって必要に応じてクラスで共有したり。つまりわたしが感じている「情報量」は「発話量」だけではないのかな、と思っていたら、脳研究の川島隆太氏の「オンラインでは情報は伝達できるが感情は共感していない」という実験結果を新聞で見つけ、なるほど、と感じた次第です。この知見が学習効果に与える影響については今後検証されていくでしょう。

そのことに関連して、学会の開催方法について考えてみました。海外の CALL 系の学会では、以前から発表の枠組みに Virtual Presentation がありましたが減多に発表者はいませんでした。VISA なしで容易に海外にでかけられる日本国籍を持っていると、膨大な量の申請書類を提出して参加している他国の研究者が多いことをつい忘れてしまいそうになります。けれども、そうした煩雑な作業をこなす渡航の費用をかけてでも、みな対面で場を共有することを望んできました。コロナ禍の現状では仕方がないとはいえ、学会で先生方と直接お目にかかりたい、と心から願っています。

最後になりましたが、この度 LET 関西支部の運営委員を退任することになりました。Time flies... 2000 年の就任早々、支部事務局のお手伝いや FLEAT IV の実行委員などで右往左往していたのが、まるで昨日のこのことです。この間、支部事務局長を4年、本部事務局長も4年、全国研究大会の事務局長も務めさせていただきました。学会の運営に関わったことで、研究発表するだけでは得られない多くの方々とのつながりに恵まれたことは、わたしの「宝」だと感じています。

2021 年度秋季大会 プログラム

日時 ■ 2022 年 12 月 12 日(日) 10:15-17:00

会場 ■ オンライン開催

10:00 受付開始

10:15-10:30 開会行事

司会 ◆ 大和 知史 (事務局長・神戸大学)

挨拶 ◆ 菅井 康祐 (支部長・近畿大学)

10:30-12:00 LET 関西支部研究部会による研究成果

ワークショップ形式 1 : 中高授業研究部会

「中学校英語教育こそ大切！」

講師 ◆ 大塚 恵理 (京都市立上京中学校)

西本 有逸 (京都教育大学)

司会 ◆ 今井 由美子 (同志社女子大学)

ワークショップ形式 2 : メソドロロジー研究部会

「APA 7th になって何がかわったの？」

講師 ◆ 住 政二郎 (関西学院大学)

司会 ◆ 深田 将揮 (神戸学院大学)

ワークショップ形式 3 : 電子語学教材開発研究部会

「実演！すぐに使えるリモートワークハック術特集」

講師 ◆ 木村 修平 (立命館大学)

近藤 雪絵 (立命館大学)

司会 ◆ 戸田 行彦 (滋賀県立守山中学校・高等学校)

研究発表形式 (10:30-11:00) : 基礎理論研究部会

「英語フォーミュラ学習のためのオンライン学習システムの開発」

講師 ◆ ラフラー ルイ (立命館大学)

金澤 佑 (関西学院大学) 泉 恵美子 (関西学院大学)

門田 修平 (関西学院大学) 堀 智子 (順天堂大学)

松田 紀子 (近畿大学)

司会 ◆ 近藤 睦美 (京都外国語大学)

シンポジウム形式 : 早期英語教育研究部会

「ライティングにおけるアウトプットの重要性」

講師 ◆ 辻 香代 (大阪市立大学)

櫻本 洋子 (四天王寺大学) 齊藤 倫子 (関西学院大学)

井狩 幸男 (大阪市立大学)

司会 ◆ 鬼田 崇作 (同志社大学)

12:00-13:00 昼食

13:00-14:50 研究発表・実践報告・Classroom Tips

① 13:00-13:30 ② 13:40-14:10 ③ 14:20-14:50

第 1 室 (研究発表)

司会 ◆ 戸田 行彦 (滋賀県立守山中学校・高等学校)

① [研] 日本語版 L2 Grit 尺度の作成と日本における L2 Grit の予備調査: 英語力および L2 学習動機づけとの関係から

山中 由香 (近畿大学) ・ 古屋 あい子 (玉川大学)

② [研] 中級日本人英語学習者による「不平」の連鎖の分析

鈴木 浩輔 (広島大学 大学院生)

第 2 室 (研究発表)

司会 ◆ 今井 由美子 (同志社女子大学)

① [研] シャドーイングの効果に対する学習者の意識
中西 のりこ (神戸学院大学) ・ 峯松 信明 (東京大学)
梶原 卓弥 (東京大学 大学院生)

② [研] 新学習指導要領の教科書に基づいた語彙リスト
開発と語彙プロファイリング アプリケーションを利用
した検証

水本 篤 (関西大学)

第 3 室 (実践報告・Classroom Tips)

司会 ◆ 鬼田 崇作 (同志社大学)

① [CT] 非同期型授業を補完する同期型オンライン講座
山内 勝弘 (広島大学) 山内 優佳 (広島大学)
中川 篤 (広島大学) 榎田 一路 (広島大学)

② [CT] Google Slides をミニ黒板として使用する
真島 由朱 (大阪府立箕面高等学校)

③ [実] 遠隔授業における共同体の活性化: 身体性を生か
したリーディング授業の試み

山本 玲子 (京都外国語大学)

14:50-15:00 休憩

15:00-16:50 LET 関西支部研究部会によるシンポジウム

「New Normal 時代 LET 関西の各研究部会はこの新時
代にどう立ち向かっていくのか」

司会 ◆ 深田 将揮 (神戸学院大学)

講師 ◆ 基礎理論研究部会 金澤 佑 (関西学院大学)

中高授業研究部会

今西 竜也 (京都教育大学附属京都小中学校)

英語発音教育研究部会 有本 純 (関西国際大学)

早期英語教育研究部会 井狩 幸男 (大阪市立大学)

メソドロロジー研究部会 浦野 研 (北海学園大学)

電子語学教材開発研究部会 木村 修平 (立命館大学)

16:50-17:00 閉会行事

司会 ◆ 大和 知史 (事務局長・神戸大学)

挨拶 ◆ 名部井 敏代 (副支部長・関西大学)

大会報告

研究部会による研究成果

ワークショップ形式 1：中高授業研究部会 「中学校英語教育こそ大切！」

講師 ◆ 大塚 恵理 (京都市立上京中学校)
西本 有逸 (京都教育大学)

中学校における外国語 (英語) 教育の実践と、それを支える理念について学べる WS であった。ヴィゴツキアの西本先生からは、思考発達の観点から I want to be... と発信させる練習でも、その思考過程が小中高生で異なる点に留意すべきこと、現場に立つ大塚先生は、現場ならではの苦労と、ICT をもちいた興味深い実践などを教えてくれた。

福島 祥行 (大阪市立大学)

ワークショップ形式 2：メソドロジー研究部会 「APA 7th になって何が変わったの？」

講師 ◆ 住 政二郎 (関西学院大学)

APA 第 7 版で何が変わったかを表向きのテーマに、「変わっていないこと」の大切さにこそ触れる WS であった。前者についてはおそらく後日公開される WS 資料が個人的には必読！と考えるが、Scholarly community に所属・貢献することへの演者の情熱が印象に残った。親密な雰囲気が進む濃厚な時間であった。

山本 勝巳 (流通科学大学)

ワークショップ形式 3：電子語学教材開発研究部会 「実演！すぐに使えるリモートワークハック術特集」

講師 ◆ 木村 修平 (立命館大学)
近藤 雪絵 (立命館大学)

実際に講師 2 名が使う ICT の活用 Tips として、Zoom 設定、画面上の字が見にくい時の対処、仮想デスクトップ、Toby Mini、リンク文字列の一部だけを抜き出す方法、スライドショーで画面が占拠されない方法、クリップボード履歴、パスワード管理、Slack などのグループウェア、ファイルのバージョン管理などが紹介された。質疑応答も活発に行われた。

神谷 健一 (大阪工業大学)

研究発表形式：基礎理論研究部会 「英語フォーミュラ学習のためのオンライン学習システムの開発」

講師 ◆ ラフラー ルイ (立命館大学)
金澤 佑 (関西学院大学) 泉 恵美子 (関西学院大学)
門田 修平 (関西学院大学) 堀 智子 (順天堂大学)
松田 紀子 (近畿大学)

講師陣は英語のフォーミュラを効果的に学習する方法としてオンラインで動作するシステムを開発し、その効果を検証しながら研究を進めている。本発表は、例文や音声を含むフラッシュカード形式を採用していること、学習者の回答状況に基づく出題アルゴリズムや記憶に関する知見に基づく学習日程を設定していること、および実践によって得られたデータ等について詳細に報告するものであった。

中西 正樹 (摂南大学)

シンポジウム形式：早期英語教育研究部会 「ライティングにおけるアウトプットの重要性」

講師 ◆ 辻 香代 (大阪市立大学)
櫻本 洋子 (四天王寺大学) 齊藤 倫子 (関西学院大学)
井狩 幸男 (大阪市立大学)

本発表では、書記言語におけるアウトプットの重要性について小学校から大学までの系統性に視点を当てて発表がなされた。学校現場からの発表を受け、脳科学の視点から「ライティングは、音声と同時に並行的に進めてもよい。つまり、書く活動が児童の負担や学習の支障にならない限り、できる限り早い時点で聞く話す活動と同時にスタートさせてもよい。そのヒントとなることが脳科学の視点からも言えるのではないか」という提案がなされた。

眞崎 克彦 (神戸親和女子大学)

研究発表・実践報告・Classroom Tips

第 1 室 (研究発表)

① [研] 日本語版 L2 Grit 尺度の作成と日本における L2 Grit の予備調査：英語力および L2 学習動機づけとの関係から

山中 由香 (近畿大学) ・ 古屋 あい子 (玉川大学)

本研究では、「努力の粘り強さ」と「興味の一貫性」の 2 因子から構成される Grit (やり抜く力) について、特に日本人 EFL 学習者の Grit を明らかにするため、Teimouri (2020) による L2 Grit 尺度を含む 4 つの尺度を使い、合計 43 項目から成る質問紙調査と英語力測定 (TOEIC Listening & Reading) を実施した。その結果から「興味の一貫性」と英語力の相関性のほか、L2 学習動機づけと「努力の粘り強さ」にも (強い) 相関性があることが報告された。

布施 邦子 (大阪市立大学)

② [研] 中級日本人英語学習者による「不平」の連鎖の分析

鈴木 浩輔 (広島大学 大学院生)

「不平」の連鎖に関する研究が希少である中、本発表者は大学生を対象にモダリティマーカで分類された英語の表現例をもとに、不平が生じる場面設定を行い検証した。その

結果、複雑で社会的リスクが高い「不平」には多くの談話機能があるが、社会語用論的知識と語用言語学的知識の差をパラ言語で緩和しようとする様子が見られたことが判明した。

戸田 行彦 (滋賀県立守山中学校・高等学校)

第2室 (研究発表)

① [研] シャドーイングの効果に対する学習者の意識

中西 のりこ (神戸学院大学) ・ 峯松 信明 (東京大学)
梶原 卓弥 (東京大学 大学院生)

半期の授業でのボトムアップ・シャドーイング課題による学習を通して、受講学生は、メタ認知・音声知覚・音声産出等への効果を実感し、リスニング・スピーキング能力への効果を感じていることが報告された。質疑応答では、実際の効果測定等も予定されているとのことで、今後も成果が期待される研究発表であった。

河内山 真理 (関西国際大学)

② [研] 新学習指導要領の教科書に基づいた語彙リスト 開発と語彙プロファイリング アプリケーションを利用 した検証

水本 篤 (関西大学)

2020 年施行の新学習指導要領では学習する英単語数が増加し、小学校で 600-700 語、中学校で 1,600-1,800 語、高校で 1,800-2,500 語となり、合計で 4,000-5,000 語になった。本研究では新学習指導要領の教科書に基づく語彙リスト (JET2020) を開発、その有用性の検証を行い、分析の結果、JET2020 は各種英文を 95%以上カバーできることが明らかになった。また、他の New Word Level Checker に掲載されている学習語彙リストと比較しても、日本人英語学習者が学ばべき語彙をより明確に示すことができるため、その有効性が確認されたことも報告した。

今井 由美子 (同志社女子大学)

第3室 (実践報告・Classroom Tips)

① [CT] 非同期型授業を補完する同期型オンライン講座

山内 勝弘 (広島大学) 山内 優佳 (広島大学)
中川 篤 (広島大学) 榎田 一路 (広島大学)

2020 年度より受容型技能養成のためのオンライン授業を実施したが、当時生じた課題に対応すべく、2021 年度前期において、学習内容を補完するための同期型オンライン講座も実施した。参加者数が伸び悩むなどの課題は残るものの、同時双方向性を意識した演習を実施でき、講座前に得られた質問や正答率などを基に、焦点を絞った解説・的確なフィードバックを与えるという成果を得た。

阪上 辰也 (広島大学)

② [CT] Google Slides をミニ黒板として使用する

真島 由朱 (大阪府立箕面高等学校)

Google Slides を板書代わりに使用する方法が示された。

黒板に比べ、板書時間の短縮、視認性の向上、ホワイトボードなどの道具なしに簡単に情報共有ができるといったメリットがある一方、生徒の解答を並列することが難しい、操作ミスによってテキストボックスが消える、といったデメリットに留意しながら、効果的に活用するとよい。

富永 幸 (大津商業高校)

③ [実] 遠隔授業における共同体の活性化：身体性を生かしたリーディング授業の試み

山本 玲子 (京都外国語大学)

本発表は、共同体の活性化をするための様々な工夫 (書物との対話、学習ストラテジーの指導、教師の語りの工夫、学習者による表出、グループへの所属感) をオンライン授業で行うことで、どのような効果が得られるのかを示すものであった。授業中の教師と学生のやり取りや授業後の学生の振り返りの記録からは、それらの工夫が学生を学びへ真摯に向かわせる効果を持っていることが示されていた。

鬼田 崇作 (同志社大学)

研究部会によるシンポジウム

「New Normal 時代 LET 関西の各研究部会はこの新時代にどう立ち向かっていくのか」

講師 ◆ 基礎理論研究部会 金澤 佑 (関西学院大学)
中高授業研究部会

今西 竜也 (京都教育大学附属京都小中学校)
英語発音教育研究部会 有本 純 (関西国際大学)
早期英語教育研究部会 井狩 幸男 (大阪市立大学)
メソドロジー研究部会 浦野 研 (北海学園大学)
電子語学教材開発研究部会 木村 修平 (立命館大学)

関西支部の6つの研究部会が、その設立時から取り組んできた研究テーマや課題を紹介するとともに、新型コロナウイルス感染症で様々な制約を受けた約2年間の研究活動や実践に関する模索や経験、そして今後に向けてのビジョンを報告した。共通した研究テーマを取り扱っている基礎研究部会や早期英語教育研究部会からは、コロナ禍においても、遠隔オンライン研究会で自らの研究活動を継続し研究結果を発信してきた様子が報告された。一方、言語教育実践に比重が多い中高授業研究部会や英語発音教育研究部会からは、感染症対策が要求される教育現場の実情と実践の課題や課題克服にむけた模索が発表された。メソドロジー研究部会による、遠隔オンラインと対面での研究活動の質的相違点の分析や、電子語学教材開発研究部会による、変容するICTと言語教育のあり方への提言は、現在の私達の他者とのかかわり方や働き方すべてを含む「生き方」に関する考察のきっかけにもなった。今後、ますます加速するであろう外国語教育現場の変容、そして新しい言語教育理論に関する議論に、関西支部の6研究部会はしっかり対応し貢献していく気概を力強く示した。

名部井 敏代 (関西大学)

編集後記

LET 関西支部通信 62 号をお届けします。支部通信について、ご要望・ご提案等ございましたら、支部通信編集委員会までお気軽にお寄せ下さいますよう、お願い申し上げます。(編集委員会)

編集発行 ● 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部

www.j-let.org/kansai/

事務局 ● 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部事務局

〒675-8501 神戸市灘区鶴甲 1 丁目 2 - 1 神戸大学大学教育推進機構 国際コミュニケーションセンター

大和 知史 研究室内

E-mail : kansaiet@gmail.com

郵便振替口座 ● 00930-3-7146 / 加入者名 ● 外国語教育メディア学会関西支部